

美しNIPPON

水野美術館コレクションから ⑤

横山大観

「鶉」

1925(大正14)年



秋の季語である鶉は、特徴的な鳴き声で季節の訪れを告げる鳥として古くから知られる。ここでは、ふくよかな鶉が1羽、色づいたコナラの枝葉の下で、ふと首をもたげている。枯れかけた葉は虫に喰われ、団栗もところどころで実を落としており、晩秋の場面だと気づく。

描いたのは近代日本画の巨匠、横山大観(1868~1958年)。制作姿勢を「想ううちに満ちれば筆おのずから動く」と述べ、猛々しい富士や絢爛豪華な夜桜、墨一色で描いた壮大な山水図など、目まぐるしいほどに多様な表現を「大観らしき」として次々に生み出し、日本画壇をけん引した。

しかし、ここではあくまで写実に徹し、枯葉の乾いた質感や鶉の羽の柔らかな触感までもが再現されている。葉の部分のじみは、私淑していた琳派の伝統的な「たらしこみ」の技法を用いたもの。緑青の顔料のきらめきや金泥

美の秋の照観自然な繊細

の色彩が実によく映えている。

大観は、個の表現を目指したのに加え、愛国主義と言われるほど、日本ならではの「美」を追求し続けた画家でもあった。本作からは、繊細な自然照ととも、深まりゆく秋の何気ない風景へ向け大観の率直な感動が伝わってくる。

(水野美術館学芸員 高田紫帆)

◇ 長野市にある水野美術館のコレクション展が京都で開催中だ。展示品の中から横山大観、上村松園らの作品を同館学芸員の高田紫帆さんに紹介してもらおう。

|| 3回掲載します

「水野美術館コレクション 美しNIPPON」展は、美術館「えき」KYOTO(京都市下京区)で8月2日まで開催。会期中無休。有料。